

chach Interpretation.

「意味」の臨床

現実をめぐる病理

李 敏子著

新曜社、四六判218頁、2,800円、2002年5月刊

(東京大学大学院教育学研究科) 田中千穂子

学校から帰ってきた子どもに「今日はどうだった?」と母親が尋ね、「別に」という答えが返ってくると、本当に何もなかったと捉えてしまう、ということが日常場面でしばしば起こる。心理臨床家でも同じような表面的な捉え方をしてしまう……こともある。だからこそ、言葉によるコミュニケーションを考え直さなければならない時期にある。その意味で本書は実にタイムリーな登場だと筆者は思った。

とはいって、これは難しいテーマである。果たして自分にこの本を理解することができるのか? と怖くなってしまった。しかし“怖い”ということは魅きつけられている証もある。そこで、怖る怖るまえがきを読んでみた。「現実」と「意味」という二つがキーワードらしいということがわかる。この二つはどう絡むのか? つぎに目次をめくってみた。「不確かな意味」「確かさを得るために」「治療という現実」という大テーマの順にそれぞれがいくつかの章で構成されている。読んでゆけば不確かな意味が確かなものになってゆく、ということか。しかしそれと最後の「治療という現実」とはどのように関係してくるのか? と? マークが渦巻いた。

中身を読んでいくと、「ああそうそう」「そうなのよ」とうなずく箇所もある一方で、どうしてそう読みとったのかがわかりにくい箇所もあった。

著者は「臨床におけることばの意味とその限界」について、概念にとらわれることのまずさ、直観的理解に頼りすぎることの危険、意味の固定化や額面通りに受けとったり、表面的なやりとりからくるディス・コミュニケーション、その操作の多様性・簡便性という利点によってもっとも虚偽を含みやすい、といった視点から、ことばの意味は表された言葉のみからでは理解できない、ということを力説する。そして「ことばの意味は言葉に内在するのではなく、

発話者の性格や言葉が発せられた状況、対人関係の網の目など、ことばの外からしか正しく理解できない。ことばは理解のためのヒントを与えてくれるが、意味を直接指示してはいない……したがって、ことばだけを断片的に切り取って意味を理解しようとする試みは失敗せざるを得ない」と結論する。だから「ことばの内容に必要以上にとらわれることなく、見ること、感じとることなど、ことば以外の感覚をいかして言葉の意味をよみとらなければならない」と述べていく。

著者と同様、筆者自身も、言葉の使い方のむずかしさや意味の共有というようなテーマについて、深く関心を抱いている。筆者はことば自体に意味があるのではなく、相手に伝えようとする人と、その人の意をくもうとする人との関係性によって意味が生じると考える。だから意味は言葉の外にあるのでも内にあるのでもなく、関係によって生まれもし、歪みもし、変わりもし、死にもする。心理臨床家であれば誰でも、相手の意をくもうという情熱はあるほどにたくさんあるに違いない。しかし気持ちがあることと意をくめるということは別のこと。どうすると意をくんだ対話ができるのかということは、心理臨床における普遍的なテーマだろう。

著者はあとがきで「臨床の意味について、数年間断片的に考えてきたことを1冊の本としてまとめた」と書いている。確かにもりだくさんの内容がテキパキと描かれているが、それぞれについて、ひとつひとつ階段を昇るように追いかけながらゆっくりと納得し、味わいながら読み進めてゆくことがむずかしかったという感じが残る。「そうじゃないのよ」「そうあってはならないのよ」というような、この問題をめぐる著者の憤りのような感情をナマに感じる一方で、その勢いに圧倒され、いささか不自由になってしまう。ごちそうの量も大きすぎて、何となくうまく消化しきれない……。

著者自身の思索の全体の素描（デッサン）を見せもらったというのが本書で、個々の部分についての詳細かつ精緻な表現（言葉化）は今後あらためて教えてもらえる、というように本書の位置を定めると、少し頭のなかがすっきりするのかもしれない。とくに「治療という現実」という部分に関しては、これまでの論文を加筆修正したことだが、欲張りなのかもしれないがやはり前二つのテーマとの関連でもう少していねいに解説してもらえるとありが

たかった。

最後に、著者は本書では触れていないが、筆者は最近、意をくむという対話が成立せずに文字通り、「語られた言葉」だけでしかコミュニケーションできない人もいるというような臨床場面での感触をもっている。通常のことばによる関わりとは異なる世界に住んでいる人々の現実と意味をどのように自分たちが共有し理解してゆくかという問題も含めて、「意味の臨床」について私たち心理臨床家は考えていくことが求められているのだろう。いろいろな意味で刺激的な一書である。